

濟州4・3をめぐる巡礼—無辜な死を悼む旅路— Pilgrimage to Jeju 4.3 - Journey to mourn the death of innocents

伊地知 紀子
Noriko IJICHI

The areas related to the Kwangju Minjung Uprising in 1980 have been recognized as "sacred places," and in South Korea it is called a "pilgrimage" (sunrae) when people visit them and hold memorial services for the innocent people who died. In this report I first make reference to the Kwangju Minjung Uprising, from which the "sacred places" arose, and to the Kwangju Pilgrimage (sunrae). Second, I take up the movement forming around Jeju 4.3. I recognize these contemporary "pilgrimages" as social phenomena which change dynamically in history. From this point of view, I consider the meaning of making a journey to mourn the death of innocents.

1. はじめに—韓国における現代の巡礼

韓国では、軍事政権に対する民主化を求めるうねりが高まるなかで1980年に起きた光州事件の関連地が「聖地」化され、そこを訪れるることは無辜な死を供養し鎮魂する「巡礼（スンレ）」と呼ばれる。ここにおける巡礼とは、いわゆる宗教施設や信仰に関する場への巡礼を意味するのではない。古来「聖地」と呼ばれる場所は、有史以前から決まっていたのではなく、それぞれ「聖地」化の歴史をもつ。つまり、いかなる時代においても新たな聖地が生まれる可能性はある。

本稿では、遺蹟（歴史的事件の跡：慰靈碑や現場）をめぐる巡礼の誕生を韓国現代史から捉えることにしよう。まずは、現代における「聖地」誕生の発端となった光州事件と光州巡礼について概観したうえで、濟州4・3をめぐる動きを見ていく。濟州4・3とは、南朝鮮政府樹立に向けた単独選挙に反対する民衆が武装蜂起した1948年4月3日を示す呼称である。光州事件も濟州4・3とともに、〈アカ〉の歴史として長く韓国現代史のなかで隠蔽されてきたが、民主化の流れとともに〈正史〉の舞台に引き上げられた。ともに国家による謝罪を受け、現在では光州市も濟州道も行政としてこれらの歴史的事件の遺蹟を整備し、国内外から人びとが訪れている。これら巡礼の誕生を歴史のなかでダイナミックに変容する社会現象として捉えることによって、無辜な死を巡る旅路につくことが生者にいかなる意味をもたらすのかということについての考察を添えたい。

2. 光州巡礼

1) 光州事件の展開過程

軍事クーデターによって1963年以後政権のトップに立ち続けてきた朴正熙が1979年10月に暗殺され、濟州島以外の全国に戒厳令がしかれた。次期政権をめぐる軍内部での勢力対立が浮上する一方で、金大中・金泳三を始めとする民主化への動きとともに労働争議や学生による民主化運動が展開されていく。こうした一連の動きを弾圧したのが、全斗煥をはじめとする新軍部による5・17クーデターであった。

新軍部は濟州島を含む全国に戒厳令を拡大し、言語および情報統制・政治運動の停止などを布告する。このような事態のなか、朴政権下で逮捕され朴大統領暗殺後に解放された教授・学生などを始めとする市民が、

1980年5月18日から27日までの間、韓国全羅道の中心都市、光州において民主化を求める民衆抗争を展開する。市民軍となった民衆は機動隊、さらには投入された空挺部隊ともぶつかることになるが、一瞬の自治を得る。しかし、駐留米軍が、指揮下にある四個大隊の韓国軍投入を承認し、市民軍は武力制圧された。これが光州事件である。その流れを簡単にまとめたものが表1である。

表1 光州事件：1980年5月14日から27日

- | | |
|----------|--|
| 5月14日 | 大学生による「民主大聖会」開催。 |
| 5月17日 | 非常戒厳令、全南大学校などに軍が進駐。 |
| 5月18日 | 休校令、学生デモ、戒厳軍投入。 |
| 5月19～21日 | 市民デモ、車両デモ、「市民軍」結成後道庁占拠。 |
| 5月22～26日 | 道庁前には5万人の市民が集結。市民軍による光州自治。 |
| 5月27日 | 駐留米軍の指揮下にある韓国軍の光州投入を承認。道庁を武力制圧。 |
| | 犠牲者数：民間人168名、軍人23名、警察4名、負傷者4782名、
行方不明者406名。（2001年までの韓国政府公数＜文京洙 2005:147） |

2) 光州：<アカ>の地から聖地へ

光州事件は、その過程においてすでに反政府運動と規定され、全斗煥新政権によって立ち上げられた国家保衛非常対策委員会によって封印された。そのため、<アカ>の陰謀として「なかったこと」として正史の闇に葬りさられようとしていた。しかし、民主化運動の息吹は途絶えることなく引き継がれ、1987年大統領直選制改憲を求める民主化運動側と新軍事政権とのあつけのなか、全国でさまざまな市民100万人による6月民主抗争が繰り広げられる。敗北した新軍部は、大統領直接選挙制改憲、言論の自由、反体制運動家の釈放などを盛り込んだ「6・29民主化宣言」を発表する。開催の決まっていたソウル・オリンピック前年のことであった。

同年12月新軍部にいた盧泰愚が大統領に就き、光州事件を「民主化のための努力」と認め、1988年国会において光州事件に関する国会特別委員会が設置され真相究明運動へと繋がっていく。こうして光州事件は反体制運動から民主化運動へ、「なかった」歴史から「あった」歴史へと公的に捉え返されていったのである。

この頃から、事件当時「アカ」として189名の遺体がひとまとめに埋められた望月洞への参拝も含めた光州巡礼が始まる。



写真1：望月洞にある墓地「民主公園」

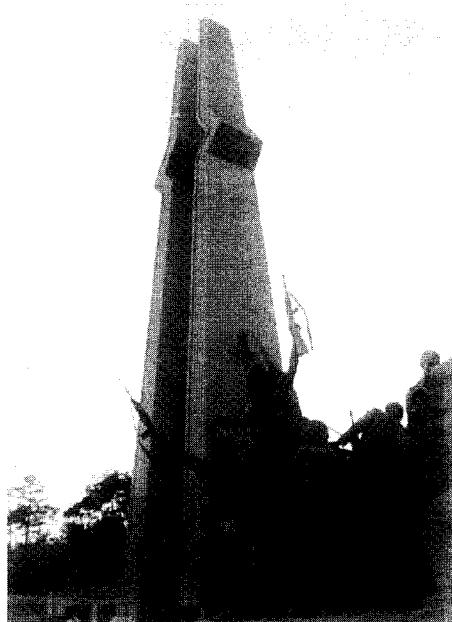


写真2：「民主公園」内のモチーフ



写真3：「民主公園」内の墓

3) 光州巡礼の制度化

1992年第14代大統領に金泳三が就任した。30年ぶりの文民政権の樹立であった。この頃から、活動家や在野団体から構成された5・18行事実行委員会による追慕行事が制度化していく。80年代以降毎年5月には、5・18の真相究明と民主化を求める集会やデモが続いてきたが、ここで「五月行事」として、慰靈祭（仏教）、鎮魂祭（キリスト教）、クッ（シャーマニズム）、絵画、文学、学術討論、写真展、音楽、演劇などが連日開催されるようになる。

また、金泳三にとって懸案事項であった「歴史の見直し」は、1995年不正資金問題を契機として、盧泰愚が全斗煥とともに逮捕されることにより前進する。同年、国会では「5・18民主化運動等に関する特別法」が制定され、97年この特別法にもとづき大法院は全斗煥を無期懲役、追徴金2205億ウォン、盧泰愚を懲役17年、追徴金2268億ウォンを宣告した。同年、「光州民主化運動関連者被害補償等に関する法律」が制定され、犠牲者の名誉回復と被害補償が実現に向けて進んでいく。さらに、5月18日が国家記念日に制定され、政府の支援を受けた光州市は、望月洞に5万坪の墓地を造成し「民主公園」として犠牲者を埋葬した（写真1, 2, 3）。現在では、光州市のホームページに「光州の名所」として「5・18民主化運動」の項目があり、5・18記念文化センターなども紹介され、光州市が光州巡礼の地図を発行し、5・18記念財団による巡礼パンフレットを刊行されている（写真4, 5）。このように公的認証を受けたからといって、すべての問題が解決したわけではない。それゆえに、光州は民主化の聖地として正史の舞台にその存在の重さを示しているのである。

5・18 민주화운동 사적지

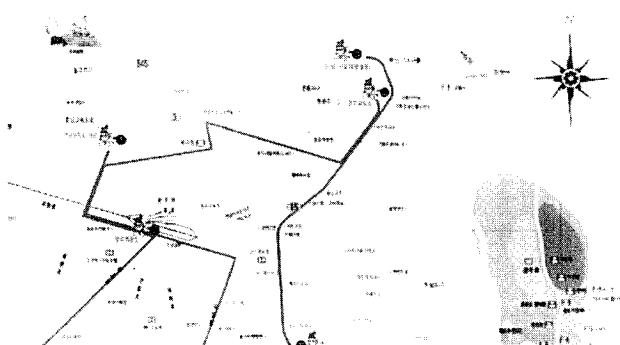


写真4：5・18民主化運動史蹟地
(光州市発行；一部抜粋)



写真5：光州巡礼パンフレット
(5・18記念財団発行)

3. 済州4・3をめぐる巡礼

1) 済州4・3とは

済州4・3もまた、韓国民主化の流れのなかで正史にその史実を刻むことになった。済州4・3とは、朝鮮半島の南に位置する済州島で1948年4月3日、南朝鮮単独選挙に反対する島民による武装蜂起と、その後繰り広げられる権力者による苛酷な弾圧を指す。

1945年日本の植民地支配から解放された朝鮮では、建国準備委員会を始め新国家建設の気運が高まっていた。その頃、朝鮮の分割統治を狙う米ソの思惑が米英ソ三国外相会議で確定され、朝鮮半島は両大国の信託統治の下に置かれることになる。この信託統治に対して賛否をめぐる対立と混乱が朝鮮半島に巻き起こる。済州島では47年の3・1独立運動記念集会での軍政警察による市民への発砲事件をきっかけとして米軍政への不信は強まり、島内において左右を問わず非難の声が生まれ、韓国史上「類例のない」官民ゼネストが全島で展開された。陸地から極右反共集団である西北青年会、さらに応援警察が投入され、島民への弾圧が強まった。こうして48年5月10日の単独選挙に向けての準備が進められる最中に、済州4・3が起きたのである。

8月に大韓民国、9月に朝鮮民主主義人民共和国が成立した後、11月には済州島に戒厳令がしきれ全島あげての最悪の事態となる焦土化作戦が始まる。海岸から5km以上の地帯にある村は焼き尽くされた。この焦土化作戦が終息する54年9月21日までの7年6ヶ月の間に、3万とも5万ともいわれる無辜の島民が虐殺された。この間、多くの人びとが、解放後も在日する家族親戚、友人のもとへと密航で避難したのである。

済州道議会の調査によれば、犠牲者の8割以上は軍・警察・右翼青年団など「討伐隊」によるものであることが明らかになっている。しかし、反共イデオロギーを国是としてきた歴代の韓国政権は済州4・3を韓国現代史におけるタブーとしてきた。それゆえ、発話者が「共産暴動」と呼ぶか「民主抗争」と呼ぶかによって、自らの政治的位置を問われるものになってきた。現在最もよく用いられる「4・3事件」という名称は、まさにその間をとったものなのである。また、虐殺を正当化するため討伐隊による犠牲者は「アカ」のレッテルが貼られ、その遺族は公職につくことも困難であった。討伐隊による被害者と蜂起した側である武装隊による被害者との間に深い溝が横たわることになる。生存者は「アカ」と見做されることを怖れ、口を閉ざし、その記憶は捻じ曲げられてきた。

2) 語られ始めた済州4・3：歴史の闇から正史の舞台へ

こうした状況は、1980年代末からの韓国社会の民主化の流れのなかで変化し始める。1990年代には慰霊事業や証言集の公刊、行政による被害者調査も実施され、2003年盧武鉉大統領は国家権力による過ちを公式謝罪した。済州4・3の被害者申告は日本でも受け付けられている。

済州島では、加害と被害の立場が複雑に絡み合うなかで、1994年から済州道の支援を受けた慰霊祭が始まる。光州と同様、「4月行事」では慰霊祭、鎮魂祭、クッ、文学シンポ、歌唱公演、遺物展、遺蹟地巡礼、学術シンポ、演劇が開催されてきた（写真6）。2000年には、「済州4・3事件真相糾明および犠牲者名誉回復に関する特別法」が韓国国会で制定され、その条文には「誰もが自由に証言できる」とある。この特別法に基づき、済州4・3事件真相糾明および犠牲者名誉回復委員会が構成され、放置されていた遺骨の発掘作業や島内各地の虐殺地保存などの活動が開始された（写真7, 8, 9, 10, 11）。こうした済州4・3関連地を辿ることを巡礼ともいう（写真12, 13）。済州市4・3研究所では、巡礼ガイドとして2007年島の北半分について『平和と人権の聖地 済州市篇4・3遺跡地踏査の道案内』を刊行し、今後は南半分にあたる西帰浦市版を作成する予定である。

現在名誉回復事業として4・3平和公園および資料館の建設が進められ、2008年には完成予定である（写

真14,15）。済州4・3もまた公的認証を受けたからといって全面解決なのではなく、補償問題や虐殺責任の究明、歴史記述など未だ課題が残されている。しかし、民主化以降の一連の動きのなかで、錯綜していた加害と被害の位置を「受難と和解」という視点に結びつける努力へと動き始めた意義は大きい。2005年韓国政府から「平和の島」と指定された済州島は今、過去の影を光に変える途上にある。

済州4・3に関連して渡日した人、また家族親戚や同郷の被害者もいる人びとも多く住む日本においては、韓国が軍事政権下にあるころから故郷の悲劇について地道に取り上げる人びとがいた。1988年には「済州島4・3事件40周年追悼記念講演会」が開催され、現在まで東京と大阪で記念行事がもたれている。しかし、人びとが抱え込まれた沈黙の枷は重く、韓国内での動きがすぐさま在日社会に伝わるわけではない。それゆえ、済州4・3を語る嘗みは始められたばかりなのである。

表2 済州4・3真相糾明への動き

1987年	盧泰愚「6.29民主化宣言」
1989年	4・3特別取材班『済州新聞』で4・3連載開始 第1回4・3追慕祭、済州4・3研究所創設
1993年	済州道議会4・3特別委員会発足
1994年	道議会、4・3被害調査に着手。
1998年	国民委・汎道民委による50周年行事
1999年	済州4・3真相究明と名誉回復のための道民連帯結成 「済州4・3事件真相糾明及び犠牲者名誉回復に関する特別法」国会通過。
2003年	4・3事件真相調査報告書確定。盧武鉉大統領が訪島、政府を代表し4・3犠牲者に謝罪。



←写真6：2001年4月3日に先立って、1日に開催された、当時の「行方不明者」の鎮魂祭で執り行われたクッ。



写真7：済州大学校の考古学チームや他の大学で考古学を専攻した人びとによる遺骨発掘作業。



写真8：済州空港滑走路横で現在行われている遺骨発掘作業（2007.11）。写真の遺骨は手を後ろで縛られている状態で埋められていた。



写真9：墓瑟浦警察署管内の住民218名が虐殺された「百祖一孫良民虐殺地」。

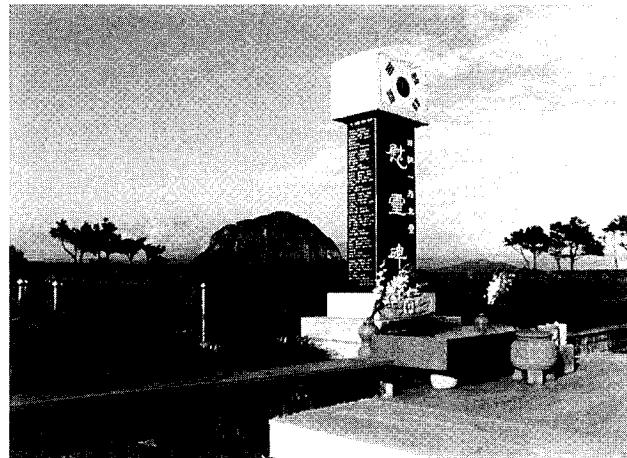


写真10：「百祖一孫良民虐殺地」から掘り起こされた遺骨のうち132体を組み合わせ埋葬された沙溪里共同墓地。



写真11：東廣里の虐殺地に建てられた碑石に刻まれた済州4・3。この人は、正房瀑布という滝から突き落とされたと記してある。



写真12：4・3研究所主催で遺族のいない犠牲者の墓を9月の「伐草（墓の草刈り）」時期に行う。この墓は衣貴里にある。



写真13：「伐草」の後、祭祀を執り行う。これも巡礼であり、儀礼の後、この村の4・3慰靈公園を訪問。



写真14：4・3平和公園

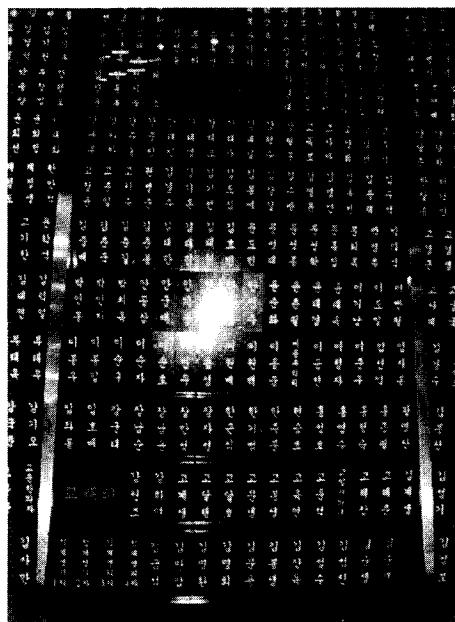


写真15：犠牲者として被害申告をした人びと一人ひとり → の名前が建物の中に刻まれている。



写真16：下貴里独自の慰靈と鎮魂の場「英慕園」。植民地期の反日運動における死者と済州4・3の死者者、そして朝鮮戦争で韓国軍に従軍した死者者が祀られている。

4. 無辜な死を悼む旅路

これまで見てきたような韓国における現代の巡礼の様相は、日本社会からみれば「彼岸」の「熱い」現象にしか見えないかもしれない。しかし、光州と済州、いずれの巡礼地にも海外から人びとは訪れる。活動家や研究者だけでなく、関心を持つ一般の人びと、そしてたまたま立ち寄った人びとまでさまざまである。さらに遺蹟を巡るという巡礼は、日本国内においても沖縄の平和の礎や関連戦跡地、あるいは広島・長崎の原爆史蹟を訪れることにも繋がっていく。ここで私が考察を促したい内容とは、このような遺蹟をめぐるという「聖地」巡礼は、人びとにとっていかなる意味をもたらすのかということである。

光州も済州も、公的認証を受ける以前から史実隠蔽の不実を問い、死を闇に葬り去ろうとする不条理を訴える人びとがいた。民主化の流れを受け歴史的悲劇への公的認証によって、慰靈と鎮魂の場をめぐる公共性は緩やかに広がりを見せている。その歴史は韓国独自のものでありながらも、その基層に流れているものは、世界の至るところで個々の存在を踏みにじる暴力に対して、人間の生と死のありようを問うものであるといえよう。

遺蹟という「聖地」は、生者（現在）が死者（過去）と出合う場である。遺族や幸存者は、そこを訪れる

ことで個別の死者と出合う。では、外部からそこを訪れるものは、何に出会うのだろうか。巡礼の地へ足を向ける人びとは、その出立においてすでに、現世における自己のあり方から足を踏み出すことを選んでいるといえるのではないだろうか。その「聖地」が、遺蹟という場であれば、当地において無辜な死がもたらされたプロセスへと思いをいたし、自らの生のありようを問うことへ誘われる。「聖地」は来訪者の属性を問うものではない。このことを示す例として、濟州島南東部の下貴里の人びとによってつくられた「英慕園」がある（写真16）。ここには、植民地期の反日運動における死者と濟州4・3の死者、そして朝鮮戦争で韓国軍に従軍した死者が同じ空間に祀られている。まさに加害と被害が錯綜するままを祀るこの空間は、韓国の民主化運動が見いだした「受難と和解」という過去の引き受け方を象徴する。光州そして濟州における巡礼とは、無辜な死を悼み、現代世界における生と死のありようを問う旅路なのである。

＜参考文献＞

- 藤永壯、高正子、伊地知紀子、鄭雅英、皇甫佳英、張叶実、2000 「解放直後・在日濟州島出身者の生活史調査（1・上）—梁愛正さんへのインタビュー記録」『大阪産業大学論集人文科学編』102号、pp. 57-74。
- 藤永壯、高正子、伊地知紀子、鄭雅英、皇甫佳英、張叶実、2001 「解放直後・在日濟州島出身者の生活史調査（1・下）—梁愛正さんへのインタビュー記録」『大阪産業大学論集人文科学編』103号、pp. 43-62。
- 藤永壯、伊地知紀子、鄭雅英、皇甫佳英、張叶実、2001 「解放直後・在日濟州島出身者の生活史調査（3）—姜京子さんへのインタビュー記録」『大阪産業大学論集人文科学編』105号、pp. 51-81。
- 伊地知紀子、2006 「解放直後・在日濟州島出身者の生活史調査」『日本オーラル・ヒストリー研究』第2号、日本オーラル・ヒストリー学会、pp. 40-51。
- 金石範・金時鐘、2001 『なぜ書きつづけてきたか なぜ沈黙してきたか？濟州島濟州四・三事件の記憶と文学』平凡社。
- 金成禮（伊地知紀子訳）、1998 「韓国 近代への喪章」（原題：Mourning Korean Modernity: Violence and The Memory of the Cheju Uprising）『現代思想』vol. 26-7、青土社、pp. 176-195。
- 北村毅、2005 「戦死者へ／との旅—沖縄戦跡巡礼における〈遺族のコミュニタス〉—」『人間科学研究』第18巻第2号、pp. 137-152。
- 真鍋祐子、2001 「現代韓国の＜巡礼＞と民族主義—光州事件（1980年）以後」『国立歴史民俗博物館研究報告』第91集、pp. 293-309。
- 文京洙、2005 『濟州島現代史—公共圏の死滅と再生』新幹社。
- 、2005 『韓国現代史』岩波書店。